

幼児の自己主張と自己抑制および 保育者の子ども理解に関する一考察

長谷川 香・巴 夏樹

Consideration of Preschool Children's Assertiveness and
Self-restraint, and Nursery Teachers' Understanding of Children

Koh Hasegawa, Natsuki Tomoe

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

幼児の自己主張と自己抑制および 保育者の子ども理解に関する一考察

Consideration of Preschool Children's Assertiveness and
Self-restraint, and Nursery Teachers' Understanding of Children

長谷川 香 巴 夏樹

Koh Hasegawa Natsuki Tomoe

はじめに

幼稚園教育要領において、「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」¹⁾とされている。2018年4月に改訂となる、幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、国の指針として、3歳以上の教育内容について共通の記載がされた。今回の改正では、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が明確にされ、その中では、知的な面のほか非認知的能力の一部でもある、情意的自己統制、人間関係についてなど幅広く示されている。非認知的能力とは、他の人とうまくかかわる力や感情をコントロールする力、自尊心など、幅広い力や姿勢を含む内面の力のことであり、経済学者ジェームズ・ヘックマン (Heckman, J. J.) によりその重要性が提唱された。近年では、幼児期における非認知的能力の発達が、その後の人生を大きく左右する重要な要素として注目されるようになっており、IQなどのような認知的能力以上に人の生涯にわたる幸福に影響を及ぼすものとされている。また、非認知的能力が一回限りの体験の中で身につくものではなく、日々の生活体験や遊び体験の積み重ねの中で、少しずつ身についていくものであるように、幼児期には、幼稚園や保育園といった集団生活を通し、子ども同士が集団で遊ぶ中、欲求をぶつけ合うなどの葛藤を経験することで、その解決方法を学びながら人とかかわる力も少しずつ身に付けていくものである。しかし、少子化や、安心して遊べる空間・時間の確保が難しいといった現状のため、子どもたちが人とのコミュニケーションを取る上で必要な社会的スキルを学び獲得しづらい環境にある。そのため、「キレる」子どもの増加や、それとは反対に、怒らない・怒れない子の存在も指摘されており、子どもが自己主張・自己抑制といった、人とかかわる上で必要となる自己調整能力をバランスよく身につけることが困難となっている。そもそも、もって生まれた気質、性格は人それぞれ違っており、小さい頃から個性を持っている。子どもによっては、感情を抑制する力を身に付けたほうが良い場合もあるし、逆に感情を抑えない方が適応す

る可能性もある。このように、人と協調性を持って生活していくための自己コントロールには、自分の欲求を我慢したり、感情を抑えることだけではなく、自分の気持ちや意見を表に出すことも含まれている。そのため、単に感情を抑制するだけではなく、自分の感情を自覚し相手の気持ちを尊重して言葉で建設的に問題を解決する「セカンドステップ」のような社会的スキルを意図的に学び身につけることは、非認知的能力の育ちにとって、さらに、その後の社会生活を送る上で意義あることである。また、保育者は、子どもの個性に配慮しつつ、子どもが自己主張と自己抑制の両面を育めるように援助していくことが必要であり、そのような社会的スキルを育てる保育者のかかわりには専門性が求められることになる。

そこで、社会的問題解決のための教育プログラムである「セカンドステップ」を日々の保育活動に取り入れている保育園の実践事例をもとに、幼児の対人葛藤場面での問題解決における自己コントロールについて、また、その場における保育者のかかわりの振返りをもとにして、保育者の専門性と資質向上における課題について考察する。

1. セカンドステップとは

セカンドステップは、1980年代に米国で開発された教育プログラムであり、日本では、2001年 NPO 法人「日本こどものための委員会」が設立され、セカンドステップの翻訳・出版・研修を行っている。幼児期に集団の中で、衝動的・攻撃的行動をコントロールし、対人関係能力や社会への適応力を高め、社会生活を円滑に送れるよう、ソーシャルスキルを子どものうちから養うことを目標にし、問題が起きたときに、子ども自身で前向きに解決することができる予防教育としての効果があるプログラムとされ、日本でも保育園や小学校などで実施されている。全体は以下に示す通り、3つの章で構成され、全部で28回のレッスンから成っている。レッスンは、子どもたちが実際に遭遇することの多いトラブルの場面を、写真やイラストなどのレッスンカードで見せ、ディスカッションとブレインストーミング、そしてロールプレイを繰り返すかたちでおこなわれる。

第1章 相互の理解

自分の気持ちを表現し、相手の気持ちに共感して、お互いに理解し合い思いやりのある関係をつくることをねらいとし、相手の気持ちを思いやり自分の気持ちを表現することの大切さを学ぶ。まず初めに、6つの基礎感情について、レッスンカードでそれぞれの表情をした子ども達の写真を見て、その表情や態度、その人の様子、まわりの状況などを手がかりにして、相手の気持ちを理解することを学ぶ。また、ロールプレイでは、実際に自分の顔やからだを使って、これらの気持ちを表現し合うことで、お互いの感じ方の違いをさらに理解するようになる。

第2章 問題の解決

困難な状況に前向きに取り組み、問題を柔軟に解決する力を養って、円滑な関係をつくることをねらいとし、自分の身に問題が起きた時、衝動的に行動を起こすのではなく、解決策をまず頭のな

かで整理し、考えられる最も適切な手法で解決をはかることを学ぶ。それを日常生活の中で繰り返していくことで、社会的に適切な形で問題解決する力を身につけていく。

第3章 怒りの扱い

怒りの感情を自覚し、自分でコントロールする力を養い、建設的に解決する関係をつくることをねらいとし、怒りの感情をひたすら我慢するのではなく、適切に怒りの感情を表現し、建設的な解決を図ろうとするものである。セカンドステップでは、怒りの感情を必ずしも「悪い感情」とはとらえていない。深呼吸をしたり、「落ち着いて」と自分にいいきかせたり、時には大人の助けを必要とする時があることを伝える。その練習を繰り返す中で、怒りの感情を社会的に認められる形で扱うことができるようにする。

1回のレッスンは30分程度で、保育者は子どもたちに、実際の子どもたちの生活に即した写真のレッスンカードを見せながら、裏面の指示に従って、導入（ゲームなど）、ディスカッション、先生の模範演技やロールプレイでプログラムを進める。レッスンは、互いを尊重したコミュニケーションを基本として進められるが、問題を解決するための言葉のやりとり、言葉の使い方を覚えさせるというよりは、態度や行動も含めた自分なりの表現を、実際に試みながら発見していけるようにする。子ども自身が自主的に考えて、自分の気持ちを言葉ではっきり言えるようにするため、ディスカッションを促す質問は、こどもが「はい」とか「いいえ」で答えられないようにして、なるべく長く話せるようにする。さらに「良い、悪い」の評価をせず、一人一人の考えを尊重することで、話しやすい環境がつけられ、子どもの発言が促進されることになる。このように、子どもは積極的に発言し、楽しく遊びながらソーシャルスキルを学ぶが、大切なことは学んだスキルが身につくように、日常生活で展開していくことである⁸⁾。

2. 方法、手続き

(1) 対象

A市Y保育園 5歳児クラス 24名

(2) 期間

2014年5月～2014年11月 (1クール28レッスン) 実施

(3) 方法

実施場所はY保育園5歳児保育室で、レッスンはクラスの担任保育士が実施。レッスンは原則週に1回で、通常の保育に支障をきたさない時間帯（午前活動の時間、午睡前の時間、または午睡後おやつ前）におこなった。日頃の園生活では絵本の読み聞かせ等、床に座って保育者の話を聞くことが多いため、セカンドステップのレッスンでも開始当初は違和感がないよう椅子に座らずレッスンを実施した（図1）。また、子どもたちが集中しやすいよう配慮して、少人数のグループ（8名前後）単位で実施、その後、子どもたちがレッスンに集中して取り組む様子から、椅子に座って

も実施可能であると判断し、人数も増やしてクラス単位でおこなうようになった(図2)。レッスンの所要時間は約40分である。実施後、日常生活での展開として、担任保育者、および「セカンドステップ」の研修を受けた保育者が、生活の中でどのような出来事があってどのような気持ちになったか、その時相手はどのような気持ちだったか、解決策はうまくいくやり方だったか等を話題にし、「セカンドステップ」の練習をふまえてかかわった。さらにレッスン後には「セカンドステップ実践記録」用紙にて、個々の子どもたちの様子について、エピソードなども含め記録を残した。また、保護者の理解を得るため、保育園から園便りとして、プログラムの概要を示したお知らせを保護者に配布した。さらに「セカンドステップ通信」を作成し、実施の様子を文書で保護者に知らせるとともに、保育参観でプログラムを実施(図3)、実際のレッスンの様子を見学することで、理解を深めてもらえるよう配慮した。



図1



図2



図3

(4) セカンドステップのルール

- ①話をする時は静かに手をあげ、指名されてから起立し発言する。
- ②話を聴くときは、耳と目を使って(話している人を見る)聴く。
- ③先生や友だちの話は、最後まで静かに聴く。

(5) レッスンの流れ

①導入「私の気持ち」

みんなで一緒に歌う時、「気持ち」を意識するための工夫として、「胸に手をあてる」身振りをつけた。子どもたちのレッスンに対する楽しみな気持ち、期待感が高まり、これからレッスンが始まるという気持ちの切り替えにもなっている(図4)。

②レッスンカードの説明

実施数か月後には、レッスンのルールが浸透し、おしゃべりもせず、保育士の話をしっかり聴くことができるようになる。

③レッスンカードを見て感想、意見を発表する

自分の意見を発表したい気持ちから、立ち上がってアピールする子どもがいる一方(図5)、みんなの前で発言するのが恥ずかしく、発表する時になると声が小さくなってしまう子どももいる。

保育者は、しっかり耳を傾け意見を拾い上げ、状況によっては代弁するなど、子どもが安心して発表できるような援助を行い、次への自信につなげる（図6）。

④ロールプレイ

ロールプレイの題材を子どもたちの日常に添った内容にすることで、幼児なりに具体的なイメージを持つことができ、それぞれが解決策を考えさまざまな意見が発表される。

⑤まとめ

当日のレッスン内容の振り返り。



図 4



図 5



図 6

(6) 保育者への聞き取り

実施後クラス担任及び「セカンドステップ」実施保育者に対し、以下の質問項目への聞き取りをおこなった。

質問1：子どもたちの実施後の様子

- ・子どもたちは楽しく参加できたか
- ・友達同士のやり取り（遊びの中）での気付き
- ・半年間の子どもたちの育ち、変化についての気付き

質問2：「セカンドステップ」実施により、保育者自身の学びになったもの

3. 結果と考察

(1) セカンドステップを実施しての子どもの変化

導入当初は、異年齢保育をおこなっているクラスの5歳児だけを対象に、別室に移動してレッスン実施した。そのため、子どもたちは、レッスンの時間、自分たちは年長児で、他の子どもたちとは違う存在であるという特別感を持つことができ、レッスンにも入りやすかったようである。また、「セカンドステップ」では、図版にさまざまな人種の子どもが登場するため、子どもたちが日頃の生活場面もイメージしながら他者の気持ちを考えるという点では、日本の子どもたちを対象にレッスンをおこなうのは難しいのではないかという疑問もあった。しかし、白黒のカードであったことや外国人の子どもの写真が使われていたことが逆に興味を引いたのか、子どもたちは毎回楽しみに

レッスンに参加することができた。さらに、写真に写っている子どもの表情など、注目するべきところをとらえることもでき、違和感なくレッスンを受けることができた。また、プログラムを開始した当初、園児たちには緊張する様子も見られ、保育者の問いかけにどのように答えたらよいかわからず、戸惑う姿がみられた。元気に手を挙げて、いざ指名すると「考え中」と答えるなど、みんなの前で自分の意見を言うことが難しい子どももあり、みんながすぐに自己表現できるわけではなかった。しかし、レッスンを重ね、他の子どもの話を聞けるようになるにつれ、自分の意見も言えるようになり、子どもたちがプログラムに積極的に参加する姿が見られるようになった。このように、初めはなかなかみんなの前で意見を言えなかった子どもが、しだいに自分の意見を堂々と発表できるようになり、40分のプログラムの間も椅子に座り集中してレッスンを受けられるようになった。このことから、自分の考えを言語化して発表することで、日常生活で体験した事を頭の中で整理することができるようになり、言葉で自分の意見を発表するという、自己表現する力にもつながったと考えることができるのではないだろうか。また、「セカンドステップ」のレッスンで「自分の思いを表現する」ということを経験し、集団の中で自分の要求などを表現できなかった子どもが、それを否定されずに認められ保育者に受け入れてもらえたということから自信につながり、しだいに積極的に発言するといった行動変化につながったと考えられる。同様に、ロールプレイに参加できなかった子どもも、保育者に受け入れられているという安心感を持つことができたため、みんなの前で演じることができるようになったのではないだろうか。

今回の実践では、当事者以外の子どもが積極的に子ども同士の葛藤場面に介入するようになったため、さらに別の葛藤場面を引き起こし、混乱を引き起こすようになるという現象も見られた。しかし、結果として子ども同士が相互交渉を持つ機会が増加したことは、他者とのコミュニケーションを学ぶ貴重な経験を持つことにつながったと考えることができる。さらに、異年齢活動の時は、5歳児が3・4歳児に教える行動が増加し「先生が〇〇と言っていたでしょう」と、年長児が年少児の不適切な言動を指摘するなど、子ども達が学習したスキルを使い出す場面が増え、年長児としての自覚をもちながら、自分なりに考えて行動してみようとする子どもたちの姿がみられるようになった。このように、第三者の立場で冷静と考えられるようになった子どもの様子から、皆で一緒に学んだことは集団としてのグループ全体にも影響し効果があったといえるのではないだろうか。

また、ある男児の行動変化について、以下の事例をもとにみていきたい。

『〈保育園でのエピソード：内気で自分の意見を言えなかったM君が言えるようになった！〉

保育園でお友達とおもちゃの取り合いになったM君。いつもなら、おもちゃを取られてしまいます。しかし、「ぼくは嫌だからやめて！」「順番に使おう！」と自分の気持ちや意見を言えるようになりました。自信がつき、おうちでもお母さんにそのことをお話ししてくれたそうです。』

これは、保育中によく起こる、おもちゃの取り合いのエピソードであり、セカンドステップのレッスンを受けてのM君の行動変化について、「セカンドステップ通信」により保護者へ知らせたも

のである。この事例のM君と、おもちゃの取り合いになったA君、2人の関係についてみると、セカンドステップを始める前は、M君が自分の気持ちを表現できずに我慢するなど、A君に従う形で葛藤場面での問題解決をはかることが多かった。しかし、M君が「セカンドステップ」の第1章「自分の気持ちを伝える」で学んだ、「ぼくは・・・」と自分の意見を伝えるというスキルを用いることができたことで、A君のM君への態度も変わり、2人の関係にも変化が生じたのである。保護者から、自己表現する力をつけ成長したM君について、「驚いたと同時にとても嬉しかった」と報告があったように、この事例は、保護者にとっても保育者にとっても嬉しい出来事としてとらえられている。「セカンドステップ」の学びでは子どもの主張を否定せず受け入れるという姿勢があるため、当初は、わがままでも何でも受け入れてよいのかといったマイナスのイメージを持ち、実施に否定的な意見を持つ保護者もいた。しかし、子どもが学んできたスキルを家庭で報告したり、家庭でのトラブル場面における子どもの言動を目の当たりにしたことで、保護者自身が子どもへの対応について考える機会を持てたという報告や、大人でも有効だとの声があるなど、セカンドステップが子どもだけでなく保護者へも影響を与えることがわかった。本事例のように、園生活の中で、自分の意見を言えずに泣いたり、だまっただま何も言えないという子どもが、自分の意見を言えるようになったという変化が様々な場面でみられるようになったと保育者により意識されている。このように、セカンドステップの実施は、子どもの育ちを促しただけでなく、保育者が子どもをとらえる視点を明確にし、子どもの育ちについての考察を深めることにつながった。この保育者の変化が、今まで以上に個々の子どもに合わせた適切なかわりをもたらし、子どもの変化にもつながったのではないだろうか。

(2) セカンドステップを学んだ保育者の変化

Y保育園では、園外研修として「セカンドステップ」実施のための研修会に数名の保育者が参加した。その研修に参加した保育者が中心となって、「セカンドステップ」の園内研修を実施し保育者全員が「セカンドステップ」の目的を学んだ。しかし、園内研修後、保育者からは、自分で教えるのは難しいという感想もあり、まだ実践していない保育者との共通理解を深めるということが課題であった。このように、保育者の中でも温度差はあったが、可能な限りセカンドステップを意識して子どもにかかわるようにした。

以下、レッスンを実施した保育者に、その意識や行動に変化はあったのか聞き取りをした中で、保育者の変化にかかわると考えられる主な回答を取り上げることとする。

- ① セカンドステップのレッスンカードの教示を子どもたちに伝える際、レッスンの説明がなかなか子どもに伝わらないことから、子どもが理解しているのか確認しながら伝えるようになった。子どもがわかるように話をしなければ伝わらないのだと実感し、「子どもに伝わるよう簡単に教えること」を意識するようになったことで、日頃の保育でも常に伝え方を工夫するなど自身自身の保育を見直す機会となった。

- ② 「セカンドステップ」の実践記録として、子どもたち全員の個別記録をとることで、時系列に子どもの様子をとらえることができ、一人ひとりの子どもの発達理解が深まった。また、記録を通して、自分自身の保育の振り返りにつながった。

以上のように、「セカンドステップ」を学んだことで、保育者としての自分自身を見つめ直す機会となり、子どもに対する言葉かけも変化したことがわかった。このように、保育者自身子どもへのかかわり方が変わったと自覚しており、このような保育者の姿勢が、子どもにも影響を及ぼし、子どもの変化にもつながったと考えられる。これらのことから、「セカンドステップ」の実践による子どもと保育者の変化は、「セカンドステップ」の学びをきっかけとした、子どもと保育者との相互作用によってもたらされたものと考えられることができるだろう。

4. まとめ

今回の対象は5歳児である。年長児になると保育園においては、行事等で主体的に活動することを期待され、その経験が子どもの発達に影響をおよぼすことも多い。そのため、「セカンドステップ」だけが、子どもの変化をもたらしたわけではないだろう。しかし、セカンドステップのレッスンにより、人前での発言の機会が意図的に作り出されたことは、子どもの自己表現の学びにつながったとはいえるだろう。また、保育者については、「セカンドステップ」の実践を通し、子どもへのわかりやすい伝え方など、自身の保育について振り返る機会となり、レッスンの場だけでなく、普段の保育活動においても、常に意識的に工夫し、関わり方を考えることになった。このような保育者の意識の変化が保育者同士の相互作用をもたらし、スタート時は主任保育士のみ資格を取得していたが、保育士の中でも学びたい、実践したいという声があがり、数人の保育士も実践することができるようになった。

セカンドステップは、学んだことを日常生活の中で展開する中で、対人関係のスキルを少しずつ身につけていくものである。丹羽（2012）によるセカンドステップの実践でも、子どもたちが対人関係スキルを少しずつ身につけたことと、保育者自身の保育技術の向上と学びによる相乗効果について述べられている。本実践でも、「セカンドステップ」の学びによる保育者の意識の高まりが、結果として保育者の資質向上にもつながるものと考えられ、その点からすると、セカンドステップは子どもの育ちだけでなく、保育者の成長にもつながるプログラムであるといえるだろう。このように、保育者にとって、セカンドステップの実践は、子ども理解を深めるものであり、保育者としての専門性や資質向上につながる取り組みだったといえるのではないだろうか。

今回は、量的分析を目的とはしていないが、保育者への聞き取りの結果、セカンドステップの実施は、子ども、そして、保育者にとって、ある一定の効果が期待できることがわかった。レッスン開始当初は乱暴な言動のある子どもが落ち着いて他の子どもと関わるスキルが身に着くことを目指してスタートしたプログラムだったが、その点については、はっきりとした変化は見られなかつ

た。しかし、レッスンを重ねていく中で、自己主張のできなかった子どもが自己表現できるようになるなど、子ども同士の関係性には変化がみられた。さらに、物事に集中して取り組む力や自己を表現する力の発達など、結果として就学にあたり必要とされる様々な事を学び身に付ける機会となった。

以上のように、本実践事例では、セカンドステップのレッスン実施をもとに、子どもの自己コントロールといった人と関わる力の育ちについて、また、保育者が現場での研修や実践を通して自身の保育を振り返り、それによって子ども理解を深めていく過程を見ることができた。秋田（2013）は、保育の質を実践の場において考える場合には、園において実際にどのようにやりとりをおこなっているか、そのやりとりを支える保育者の専門性としての園での実践的知識や行動方略を同定し解明していくことが、保育者の養成や現職教育のあり方を考えていくためにも必要であるとしている。2017年には、保育士の専門性向上を図るための研修について、一定の水準を確保するために、「保育士等キャリアアップ研修ガイドライン」が厚生労働省により策定された。このように、保育者の一層の専門性と資質向上が求められる中、養成校の今後の課題として、卒業後も継続して学び続ける意欲を育てていくために、今まで以上に現場と連携・協働しながら、保育の質向上に結び付けられるような保育実践力の育成のための工夫をしていくことが必要となるだろう。

〈謝辞〉

本稿執筆にあたり、保育園園長先生はじめ、主任先生ほか保育園の先生方、セカンドステップ実施クラスの園児の皆さんには多くのご協力をいただきました。心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省：幼稚園教育要領解説、256、フレーベル館、2008

参考文献

- ・ジェームズ・Jヘックマン（古草秀子訳）：幼児教育の経済学、10-44、東洋経済新報社、2015
- ・文部科学省：幼児期の非認知的な能力の発達をとらえる研究-感性・表現の視点から-、3-23、2016
- ・山田 洋平：社会性と情動の学習の（SEL）の必要性と課題 広島大学大学院教育研究科紀要 第一部、57、146-154、2008
- ・長谷 範子：幼児の対人葛藤場面における行動変容と保育者のかかわりに関する一考察、四天王寺大学紀要、47、173-187、2009
- ・鈴木 智子：子どもとかかわる人のための心理学（沼山 寛・三浦 主博編著）、68-71、萌文書林、2013
- ・大野 雄子・小池 庸生・小林 玄、前川 洋子：保育の心理学演習ブック、62-66、ミネルヴァ書房、2016

- ・渡辺 俊一：キレない子どもを育てるセカンドステップ、8-22、文修堂印刷、2006
- ・丹羽 ヤエ子：「セカンドステップ」4年間実践しての考察-佐賀県K保育園年長児をととしての
学び-、永原学園西九州大学短期大学部紀要、43、47-54、2012
- ・秋田 喜代美：葛藤場面からみる保育者の専門性の探究（吉久 知延）、野間教育研究所紀要、
52、1、10-20、2013